

診療科長に聴く

代謝・内分泌内科編

代謝・内分泌内科 教授

タカモト イセキ
高本 偉碩



本日は、代謝・内分泌内科の診療科長である高本偉碩教授にお話を伺います。

Q：高本先生の専門分野、学会の役員や授賞歴もお願いします。

A：代謝・内分泌疾患の中でも、特に専門としている疾患は糖尿病になります。

日本糖尿病学会や日本内分泌学会の評議員をつとめています。

これまで基礎研究を中心に、日本臨床分子医学会学術奨励賞や日本内分泌学会若手研究奨励賞などの受賞歴と、科学研究費助成事業基盤研究や公益財団法人日本糖尿病財団などからの研究助成の採択歴があります。

Q：高本先生が力を入れている診療、あるいは診療技術、治療はどのようなものでしょうか？

A：私自身は糖尿病のマネージメントを最も得意にしております。最新の機器（持続グルコースモニタリング：CGM）を用いて血糖値の推移を詳細に把握しながら外来で適切なインスリン注射の導入・調整を行うことや、糖尿病性ケトアシドーシスなどの緊急事態では迅速に入院加療をすすめ早期退院を目指すことに力点を置いています。

Q：高本先生は、どのような疾患を対象にしていますでしょうか？

A：糖尿病に加えて肥満症、脂質異常症・痛風などの代謝疾患やバセドウ病・橋本病などの内分泌疾患を幅広く診療しています。

Q：代謝・内分泌内科では、代謝・内分泌の疾患に対して、どのような診療技術を駆使されているでしょうか？また主要な手技の件数もお願いします。

A：当科では、インスリンポンプ使用中の約10名を含めインスリン製剤や注射薬タイプのインクレチン関連薬を使用している糖尿病患者さんを毎月330名ほど診療しており、およそ3分の1の方には上記のCGMを導入しています。また、わが国では最近になって肥満症に対する効果的な薬物療法が保険適応となりました。

健康障害を有する肥満症の患者さんには、定期的な体組成の評価と管理栄養士による栄養指導をベースに、新規の薬物療法を提供することが可能です。

（裏面に続く）

聴き手
菅原信二

放射線科 教授

・放射線学会

・放射線治療専門医

・放射線腫瘍学会 認定医

・当院広報委員長

東京医科大学茨城医療センター

〒300-0395 茨城県稲敷郡阿見町中央 3-20-1 / TEL 029-887-1161

各診療科外来担当医につきましては、当院ホームページをご確認下さい。

<https://ksm.tokyo-med.ac.jp/>

紹介患者・医療連携については、総合相談支援センター 医療連携まで



(表面から続く)

Q：代謝・内分泌内科の医師数と主な医師の専門分野や得意な診療内容について教えてください。

A：常勤スタッフ5名・非常勤スタッフ4名の計9名で外来・入院診療を担当しております。専門医の資格を有する医師数は、重複を含めて糖尿病専門医6名、内分泌代謝科専門医1名、内分泌代謝・糖尿病内科領域専門医2名となります。若手もベテランも、全員が糖尿病をはじめとする代謝・内分泌疾患を幅広く診療しています。特に甲状腺疾患の外来診療に関しては、甲状腺腫瘍が疑われる場合には超音波ガイド下甲状腺穿刺吸引細胞診を、また難治性のバセドウ病に対してはアイソトープ治療（放射性ヨード内用療法）を実施しております。



Q：大学の代謝・内分泌内科として、行っている研究活動にはどのようなものがありますか？

A：インスリンボール（Insulin Ball）という糖尿病に携わる医療関係者で有名な言葉があります。これは、インスリン注射を同じ部位に繰り返し行うことで皮下にできる硬いしこりのことで、インスリン注射の効果が大幅に減弱してしまいます。

インスリンボールは当科の永瀬晃正客員准教授・桂善也客員教授が世界に先駆けて国際学術誌に提唱した糖尿病治療に伴う皮膚合併症で、当科から沢山の研究成果を報告してきました。なお、インスリンボールは予防が大切ですので、インスリン注射を行っている患者さんは注射部位をローテーションすることがとても重要です。

Q：代謝・内分泌内科として、患者さんを診る上で診療のポリシーとしているものは、何でしょうか？

A：代謝・内分泌疾患がない人と変わらない生活の質（QOL）と寿命を実現することです。

Q：受診する患者さまに一言お願いします。

A：最先端の医療を、真心を込めて提供致します。